

26 駿府から発信された幕府政治

～大御所時代の駿府～

1 活字人間、家康



〈写真1〉駿河版銅活字

パソコンが普及し、活字は印刷の第一線から退いたような感がある。しかし、つい20年ほど前までは、すばやく一字一字の活字を拾い並べる技術は、活字職人といわれるほどの技量を必要とし、出版産業を支えていた。

〈写真1〉は、今から約400年前の銅製の活字で、駿府にいた徳川家康が中国人林五官に命じて作らせたもので、「駿河版銅活字」といわれる。今は東京の印刷博物館が32,166個を所蔵している（完成時は約9万個）。

この活字制作より先の1605（慶長10）年4月、家康は三男秀忠に將軍職を譲り、2年後の7月、城の完成とともに重臣たちと駿府に移り「大御所」として、ひきつづき幕府政治を支えた。その政治形態は、例えば大名に対する軍事指揮権は、信濃以東は江戸の秀忠から、東海以西は駿府の家康から出さ

れるなど、一般的には「二元政治」のスタイルをとるといわれる。

2 駿府政権をささえたブレイン

駿府政権を担った家康は、江戸とは異なり政治機構を整えず、有能なブレインを側近に置いていた。その第1は三河以来の重臣たちで、後に家康死後に改易される本多正純や島原の乱で戦死した板倉重昌らの行政を担ったグループである。また、第2の、僧や朱子学者のグループは、法整備や文化事業にあたったグループである。そのなかには、朱子学者にもかかわらず僧体で仕えた林羅山（かぶっていた頭巾はそれを隠すためだという）や僧天海（一説では108歳の長寿）、黒衣の宰相といわれた僧金地院崇伝らがいた。また外交や貿易を担当した商人や外国人らの第3グループには、京都の貿易商人茶屋四郎次郎や、三浦按針ことウィリアム＝アダムズらがいた。

大御所家康は1614（慶長19）年に『大蔵一覽集』を、翌年『群書治要』の出版を崇伝に命じている。『大蔵一覽集』は、仏教教典百科の索引・内容一覽のような書である。『群書治要』（50巻）は、唐の太宗が631年に編集させた68種の古典からとった為政者の心得をまとめたものである。遣唐使が我が国にもたらして以来、この書は帝王学の書として用いられてきた。鎌倉時代以降は金沢文庫におさめられ、その書の有用性を認めていた家康が所蔵するようになった。家康の死後、駿府で刊行された『群書治要』は紀州和歌山藩に伝えられ、1928（昭和3）年、一部が県立中央図書館に寄贈された。

出版の際に使われたのが、冒頭にあげた「駿河版銅活字」で、刷り上げの時に活字が安定するようV字底に統一されていた。家康が金属活字に目をつけた背景には、駿河臨濟寺で過した人質

時代から兵書に親しみ、臨濟寺じたい木版印刷物を刊行した寺院だったことがある。おりしも宣教師たちがもたらした活版印刷術や、朝鮮出兵の時、戦利品として朝鮮から持ち去った活字や印刷物が刊行された。愛書家の家康にとって、活字印刷との出会いはむしろ、必然だったのかもしれない。

3 関八州の鎮守となる

1615（慶長20）年5月、大坂夏の陣で大坂城が落城し、豊臣氏が滅びた。『大蔵一覽集』が刊行されたのはその2か月後のことであった。活字印刷物刊行にたずさわった崇伝は並行して、大名への『武家諸法度』、朝廷や公家に対する『禁中並公家諸法度』、寺社への『寺院法度』の作成も命じられ、諸勢力を統制下に置こうとした。

『武家諸法度』には、戦国大名の分国法や室町幕府の政治方針である『建武式目』などが参考にされるが、『群書治要』の影響も受けているといわれる。同じく『禁中並公家諸法度』にもその影響がみられる。『群書治要』は、家康が亡くなった直後に刊行された。彼がこれらの出版にこだわったのは、書物好きという理由だけではなく、幕府を支える基本法作成の材料とするためであった。そして、これらが駿府政権、家康のもとで作成され、江戸幕府に発信されたことは注目すべきである。

さて、駿府政権を支えた財政基盤は何だったのであろうか。江戸幕府の直轄領（この時点で240万石）や伏見城から運び出された御用金78万両などがあつた。後に廃止されるが、銀貨を鑄造する銀座もできた。また、駿府には貿易収入もあつた。「駿府糸割賦（糸割符）」がそれである。

17世紀初め、ポルトガル人が長崎などにやってきて、中国産生糸を日本に売りさばき莫大な利益を得ていた。そこで、家康は買い入れる窓口を一つにするために五カ所（長崎・堺・大坂・京都・江戸）の商人が一括購入し、その後他の商人に売買する方法をとった（糸割符制度）。しかし、実際は、一括購入以前に将軍の縁故者などが率先して買うことができるシステムになっていた。そのなかに、駿府の商人たちも含まれていたのである。これが、「駿府糸割賦（糸割符）」で、駿府商人が得た生糸は転売され、1609年から1616（元和2）年まで、毎年5,000両（1両=10万円とすると5億円）の利益が出たようである。

秀忠就任後の政治は二元政治の側面もあるが、その背後で政治・経済的に権力を握っていたのは駿府の家康だったことがわかる。自ら薬を煎じるなど健康にも気を遣っていた家康は、〈史料1〉の遺言をのこして1616年4月17日死去する。75歳であった。死因は胃ガンとも鯛の天ぷら（南蛮渡来のポラズ）があたったともいわれる。遺体は遺言のとおり、久能山くのうざんに葬られた。家康の死後、政権は秀忠の下に帰し、権力は一本化した。

〔史料1〕
「一両日以前、本上州（本多正純）・南光坊（天海）・拙老（崇伝）、御前に召されるため仰ぎ置かれ候はば、臨終候はば、御体を久能へ納め、御葬礼をば増上寺にて申しつけ御位牌を三河の大樹寺に立て、一周忌も過ぎ候て以後、日光山に小さき堂をたて、勸請し候へ、八州の鎮守になるべきためとの御意候、皆々涙をながし申候。」
〔本光国師日記〕より

〈参考文献〉

印刷博物館図録『家康は活字人間だった』

『静岡県史』通史編3近世一

若尾俊平「駿府の町人社会」（『駿府の城下町』静岡新聞社）